

昨今の「武士道」の流行をどう評価するか

日本女子大学文学部教授・文学博士

谷中 信一

(1) 武士道も日本の伝統的倫理を抜きには語れない

日本の伝統倫理の基本をなしている概念は、「恥」・「恩」・「世間」の3つに整理できるとされている。これまでも「恥をわきまえているかどうか」（つまり「恥知らず」、「恥さらし」、「恥を知れ」などの語）が自他の行動を判断する主要な基準であった。

「みっともない」「はしたない」「見苦しい」「体裁が悪い」「不調法」「恰好が悪い」などは皆そのバリエーションである。また「恥の上塗り」、「旅の恥はかきすて」、「40過ぎの恥かきっ子」「恥も外聞もない」などという言葉もあった。

同様に、「人に恩義を感じるかどうか」（「恩返しする」「恩知らず」）も自他の行動を倫理的に判断する主要な基準であった。「鶴の恩返し」（鶴が命を救われたことの恩返しをする）「浦島太郎」（亀の恩返し）「かさこ地蔵」（石地蔵の恩返し）「ごんぎつね」（狐の恩返し）などの童話から人は受けた恩を必ず返さなければならないことを幼心に教え込まれてきた。実は「親孝行」というのも、中国のそれとは意味が異なり（中国では、祖先崇拜まで含む）、日本の場合は子供が自分を育ててくれた親に対する恩返しを意味するのであった。

三つめは「世間」である。日本人が倫理規範に従って行動しようとする場合、自他の関係をすべて「世間」内関係として捉えていたために、日本人の倫理規範は「世間」の中でのみ有効であったと言っても言い過ぎではない。「世間様」「世間の目」「世間体が悪い」「世間が許さない」「世間に顔見せできない」「広い世間を狭くする」「世間に申し開きをする」「世間に背を向ける」「世間知らず」「世間の鼻つまみ者」という言葉がこれまで普通に使われていたことからわかるように、人はその与えられた世間の中で、好むと好まざるとに関わらず、生かし生かされているのだから、世間に背いてはいけないと教えられてきたのである。

「悪事をはたらく」とは、神に背くことでも、仏に背くことでもなく、「世間」に背くことなのである。従って、その報いは天罰でも仏罰でもなく、「世間からの追放」である。すなわち「自分の立場」を失うことであり、これは仕事も人間関係もすべて失うことを意味する。そのようなことになったら、人は極めて絶望的な気分させられるはずであるから、そこに自制心がはたらく。これこそが強力な規範力の源泉なのである。

ところで、「悪事をはたらく」とはどのような行為をさすのであろうか。刑法犯罪はもちろんだが、総じていえば、「世間が許さない」ことはすべてであろう。世間が許さないこととは、「恥知らず」な行為であり、「恩知らず」な行為なのである。そんなことをすれば、「世間体が悪い」し、あしたから「世間様に顔見せできなくなる」し、結局「広い世間を狭くしてしまう」ことになるし、後から

「世間様に申し開き」をしても、聞き入れてもらえるかどうか分からない。そうなるとあとは「世間に背を向けて生きる」か、「世間に隠れて生きる」か、しかない。これは最低の生き方であるし、何よりも世間にとどまって暮らしている親兄弟にまで迷惑をかけることになるではないか..。

これは一義的には倫理規範なのであって、法規範ではない。日本人は誰もが多かれ少なかれ自分の世間を持ちその中で暮らしてきたからである。これはやくざとて例外ではない。日本は治安がよいとされてきた理由はまさにここにある。

(2) 「世間」とは一体何か？

ところで「世間」とは、簡単に言えば「人間社会」のことだが、いわゆる「大衆社会」ではない。あくまでも血縁や地縁、職縁からなる閉鎖社会（むら）であり、そこに暮らす「運命共同体」のようなもので、人はその中で生まれ育ち生活し仕事している。だから誰もが世間には恩がある。こうして生きていられるのも「世間様」のおかげだ。

世間に育てられた自分がその恩を忘れ世間に背くことは、許されないことであり、従ってそうした行為は省みて深く恥じなければならぬ。だが子供はまだ経験が少なく、そうしたことへの理解が少ない、つまり「世間知らず」だから大目に見てもらえる。

また大のおとなでも「旅の恥はかきすて」と言って、自分の属する世間から離れてしまえば、恥をかくことなど何でも無いという気楽な気分になる。日中戦争において穏和で規律正しい日本兵があちこちで中国人に残虐行為をはたらいたのは、いわばこうした心理が働いたからであろうと中国人研究者は分析している。（尚会鵬著『中国人与日本人』参照）

逆に「渡る世間に鬼はない」と言うのは、お互いに顔を知り名前を知り気心が知れてくればそこに仲間意識が生まれ、善意の交際が始まるから、ひどい仕打ちを受けるはずはないと考えることによる。日本人は人見知りすると言われる。見知らぬ人にはとても警戒心を持つからである。だがいったんうち解けると、嘘のように警戒心を解いて無防備になってしまうのも日本人である。だから、海外旅行先で、「親切な」外国人に出会って嬉しさのあまりすっかり気を許したために、詐欺や盗難に遭うといったことがしばしばあるのは、そうした日本人心理の裏返し現象であろう。そこに、長年慣れ親しんだ「世間」があると錯覚してしまうのである。「これが日本の常識、世界の非常識」と言われることの真相ではなからうか。

(3) 恥の文化はその対極に名誉を持つ

名誉は功績に対して与えられる。恥が世間の否定的な評価に由来するとすれば、名誉はその反対に世間の肯定的な評判を意味する。つまり、名誉は恥の反意語なのである。人が何にもまして望むのは、「世間が注目する」ことであり、「世間から誉められる」ことである。これがすなわち名誉である。もっともこうした名誉を喜ぶ心理は日本人に限らず普遍的な欲求であろうから、特筆する必要もないかも知れない。ここでは、武士道とは恥を最も忌み、名誉を最も求めるところに成り立っている規範意識であるということだけを指摘しておこう。

問題は、名誉をどのようにして得るかその方法であろう。思うに、それは「自己のつとめ」を立派に果たすことによってである。「つとめ」という言葉が名誉と深く結びついているのである。例えば、親のつとめ、師のつとめ、主君のつとめ、家臣のつとめ等々、それぞれの立場（これを分という）にあって、その立場にあるものが求められる行為（これを本分という）を立派にやり遂げることを、「つとめを果たす」というのである。

（４）恥は世間との関係の中で感じる心理的負い目

漢語の「破廉恥」とか「廉恥心」とかは、もっぱら普遍的な倫理道德規範に照らしている言葉である。一方、「はずかしい」というのは感情に過ぎない。だから倫理道德に背くことをした場合に加えて、人がやらないこと、やりたがらないことをやる、例えば「本来は成功するべきであるのに失敗してしまうとき」、「人から期待されていながらそれに応えられないとき」にも「はずかしい」と感じることもある。例えば、「学生としてはずかしい」「男としてはずかしい」「女としてはずかしい」「親としてはずかしい」など。これは一言で言えば「役割・使命＝本分」に背いてしまったので「はずかしい」ということになる。名誉は、先にも述べたように、これとは全く逆のことになる。

では誰に対して自分がはずかしいと感じるか、その対象は、自分が属している「世間」である。つまり「世間体がわるい」ということ。逆に言えば、世間を離れてしまえば（見知らぬ土地に旅行をすれば）、はずかしいと思う範囲が小さくなるかまたはなくなる。先にも述べたように「旅の恥はかきずて」のことわざはそれを言ったものに他ならない。

「はずかしい」とか「はずかしくない」とかの基準は、自己の内面に確固とした普遍的な規範意識として定着しているわけではなく、「世間で共有されている価値観」のなかにある。従って、そうした感情が発生するためには「世間と一定の価値観・倫理観を共有している」と認識することが前提となる。だからもしそうした認識を欠いていれば、たとえ恥ずべき行為をしても、これを「はずかしい」と感じないわけである。

だから「恥知らず」な行為とは、反倫理的行為のことであるというよりも、世間から受け入れられない行為を一義的には意味することがわかる。

（５）今に残る武士道的価値観

武士の心得

まず勇敢であることが求められ、そこで「義を見てせざるは勇なきなり」とか「死を覚悟して生きよ」などということが言われた。次いで喜怒哀楽を顔に出さないことが求められ、「人前で涙を見せてはいけない」とか「歯を出して笑うものではない」ということが言われた。第三には謙虚であることが求められ、「わたくしごとを人前であれこれ自慢したり吹聴するものではない」とされた。第四に日常生活でも常に凶器を携行している武士は何よりも自制心が求められ、「ならぬ堪忍するが堪忍」と言われた。第五に寡黙であることが求められ、「本心はむやみに明かすものではない」として、「はら」が大切にされた。第六に事に当たり好き嫌いや損得から判断すべきでないとして、「損得勘定」を最も忌んだ。

これが後の「義理」の思想に通じるの。好き嫌いを言うのは女、損得を言うのは商人として蔑んだ。

「はら」の思想

- ・「はらを～（動詞）」

「はらを決める」「はらを据える」「はらを割る」「はらを見せる」「はらを見抜く」「はらを読む」「はらを探る」「はらを立てる」「はらを切る」

- ・「はらが～（形容詞）」

「はらが大きい」「はらが太い（＝太っ腹）」「はらが黒い」「はらが無い」

- ・他に「はら芸」などという言葉もある。

以上のように、「はら」は自分の立場、考え方、態度を意味し、「むね」や「あたま」よりももっと人格に深く根ざしたものとされた。生死をかけた戦場で求められるのは物事に動じない胆力、すなわちはらであった。

義理と人情の狭間での葛藤

「義理」とは、本来は正義と道理を意味し、武士として当然なさねばならぬこと、すなわち道義的義務である。これは“善”なる行為に他ならない。

従って、武士は、たとえそれが自分の本心から出たことではないにせよ、“善きこと”であれば「意地」でもやらねばならず、それが武士の“本分”とされた。それができない者は「意気地なし」と蔑まれた。

こうした「義理」の観念はやがて、本心から出た行為ではないことが多いために、「たてまえ」と言い換えられてその価値が貶められていった。つまり、「たてまえ」ですることは偽善的行為に他ならないというわけである。そうして、近代社会の個人主義の風潮と共に、自分の考えを殺してたてまえで生きることが、すなわち「偽善」だとして、嫌われ退けられることとなった。

一方、「人情」に従うことは、人としての生まれつきの性情に従って感じたり、そのまま行動したりすることで、修養のない者がする卑しい行為とされ、そのために「人情に流される」ことはあってはならず、当然克服されるべきものとして排除された。こうした観念はやがて「ほんね」という言葉で言い換えられることとなった。そうして近代社会の個人主義は、「ほんね」で生きることには価値を置き、そうした生き方こそが素直で「自由」な生き方であるとしてむしろ肯定されることとなった。

こうしてみると、“義理”を「たてまえ」、 “人情”を「ほんね」と言換えると、過去と現在とでは、“義理”と“人情”の価値観の逆転現象が起きていることがわかる。

過去には、「たてまえ」捨てて「ほんね」で生きるとは、「見苦しい」・「あさましい」として排斥され、「ほんね」を殺して「たてまえ」を掲げて生きることこそ、その本分を全うする生き方とされたのであるから。

「義理がすたれば、この世は闇だ」（「人生劇場」の歌詞の一部）という反省がありはしたものの、結局現代では、“義理”を尊重すること、つまり「たてまえ」で生きることの方が、むしろ「息苦し

い」、「堅苦しい」生き方として嫌われるようになった。
ここに武士道的倫理規範が疎んじられている現実があると言える。

武士道と儒教思想の関係

江戸時代には、「武士の儒者嫌い」ということが言われた。これは武士が、儒者が理論を重んじることからこれを単に理屈を並べて理想を言い立てる輩として嫌い、命を賭けてことを戦うことを何よりも重んじたからである。ところが、やがて長く太平の世が続き、武士たちは日本の政治指導者としての社会的責任を自覚するようになると、長らく身に帯びていた武器を傍らに置いて静かに学問をするようになった。こうして、武士が儒者を嫌うとも言えなくなり、むしろその優れた思想を進んで取り入れるようになっていった。

そうして、政治と道徳の教えを説く儒学を尊重するのに比例して、武士は、為政者としての品位品格を磨くようになったのである。例えば、明の遺臣朱舜水を招き藩を挙げて儒学を尊重した水戸徳川の光圀公は、庭園に「後樂園」（為政者たる者、「民に先んじて憂い、民に後れて楽しむ」べきことを言う）・「偕樂園」（為政者はいつも民とともに楽しむべきあり、楽しみを独占してはならないことを言う。「偕」とはともにの意味。）と名付けて、自己の政治信条をそこに託した。

武士の組織論

武士とはそもそも、戦場で勝利するための軍隊組織を形成している。武士道とはその中から生まれた、ある特定集団の中で求められた特殊な規範（津田左右吉によれば一種の「変態道徳」）である。つまり、家臣は主人の命令には絶対に服従しなければならない。たとえ死を前にしても一所懸命に戦わねばならず、決して敵から逃げてはいけぬ。こうしたときこそ命がけて戦うことが、家臣の「つとめ」なのである。主君は、家臣のそうした命がけのはたらきによって得られた手柄には、多くの恩賞で報いなければならない。このとき恩賞をケチってはいけぬ。なぜなら、それが主君の「つとめ」だからである。

恩賞を与えられた家臣は、その望外の恩賞に報いるためには、更なる報恩の志を持たねばならない。ここにおいて、主従の関係は、恩と報恩の関係であることがわかる。契約関係ではないということはそういう意味のことである。

(6) 「恥」と武士道

武士は、その名誉を得るためならば、普通の人間なら誰でもする「損得勘定」を捨てて「意地」でもやり抜こうとする。そうしてこそ「名誉」は初めて得られるからであろう。だが、そのようなときに、「名誉」を求めず、「損得」にこだわり、躊躇する者こそ、「武士の本分」を忘れた者であり、「武士の名折れ」であり、「(武士の)体面を汚す」「恥ずべき」者であり、「武士の風上にも置けない」のである。つまり武士にとって大切なのは、「利」ではなく、「義理」を果たすことによって得られる「名誉」なのである。

武士道とは「恥」の文化に支えられた規範意識と言え、「人前ではずかしめを受けることは、死ぬよりつらいこと」であり、それゆえ武士にとって最も大切なのは、自分の「命」ではなく、「名誉」であり「誇り」であった。その名誉や誇りを損なうことが「恥」そのものだったからである。だが、悪を行って罰を受けることが「恥」なのではない。自分が持っているはずのまた持っていると確信している名誉を失うことが「恥」なのだ。

(7) 20世紀90年代以降の日本社会の規範意識の変化

これまでの日本の企業社会では、従業員は終身雇用で、社宅を与えられ、年功序列で生活は保障され(所領安堵)、従業員は「企業戦士」として家庭を顧みず、会社に命を捧げ(滅私奉公)、たとえいかなる不正でも会社にと命じられれば唯々諾々と不正をはたらき、会社に殉じてきた、というのがよく知られるところである。(主従関係) その結果、日本企業は短期間のうちに世界の優良企業に成長し、数々の成功神話が作られていった。(武家政権)

「所領安堵」への反省

かつての自民党橋本派(旧田中派)が鉄の結束を誇ったのも、恩と報恩の関係が底流にあったからであると考え。彼らの派閥は、いわゆる「一族郎党意識」に支えられた主従関係が形成されていたのであろう。更に典型的な例が、企業における雇用主と被雇用者との関係である。

終身雇用制の中で、社宅を与えられ、保養施設を提供され、さまざまな運動会など会社挙げての余暇活動を楽しんできたサラリーマンとその企業との関係は「一族郎党意識」に支えられた一種の主従関係であったと言える。つまり家臣(社員)は主君(会社)の命令には絶対服従しなければならず、与えられる社宅や給与なども、自己の労働に対する正当な対価というよりは、「会社は自分のような者を雇い、こんなにたくさんの給料をくれるばかりか、こんなすばらしい住まいまで提供してくれている(=恩)。だから自分は一生懸命はたらいて、その会社(=主君)の恩に報いねばならない。(=報恩)」と考える。

日本のサラリーマンが、かつて「企業戦士」の異名を取ったのは、給料が自分の労働に対する対価という考えを持たずに、会社が自分に与えた恩賞であるというかつての武士と同じような受け止め方をしていたためであると思われる。

「恩」と「報恩」の関係は一見「貸すと返す」の関係に似ている。借りは必ず返さなければならないように、受けた恩も必ず返さなくてはならない(=恩返し)。しかしいつどのように返すかは本人次第である。もちろん返さなくても罪には問われない。それは違法行為とはならないからである。だが忘恩・恩知らずの汚名を着せられるのは間違いない。むしろその方が世間で生きる者にとっては深刻かもしれない。

「恩」の方も与えるのであって貸すのではないから、返せとは言えない。もしそれを言えば「恩を着せる」「恩を売る」行為として、今度はこちらの方が世間から非難されよう。

それゆえ「恩」は「貸す」ことではないし、「報恩」は「借りを返す」ことでもないのである。つま

り、近代民法にはない規範なのである。しかし、近代社会の法規範が定着するにつれ、またその方が受け入れやすいと感じるにつれ、従来の武士道に見られるような「恩と報恩」の関係で社会関係を捉えることが次第になくなりつつある。このことが終身雇用制度の見直し反省につながるのである。

滅私奉公への反省

また武士道では、妻子よりも主君に、孝よりも忠に重きを置く。例えば、武士が「お家の大事」と言ったときは、自分の家のことではなく、「主君の家」の大事をいう。なによりも主君を最優先する。主君の恩に命をかけて報いるためである。そこに「報恩倫理」の徹底が見られる。忠臣蔵に対する根強い人気は、まさにそうした家族を犠牲に自分の命を投げ捨ててまでも主君に忠実に生き抜こうとした武士への共感が支えている。しかし、これも人々が仕事よりも家庭での生活を大切にようになって以来、忠臣蔵の主人公らに感情移入することもなく、むしろ醒めた意識で見えるようになってきている。これも個人主義の意義が説かれ、滅私奉公が見直しされ反省されていったことによる意識の変化の反映であろう。

絶対服従への反省

さて武士道は、「葉隠」において、武士としての道＝主君に仕える道＝「奉公人」の道とされた。そしてそれはあたかも「忍ぶ恋」のごときものでなければならぬとした。武士は主君の命令に絶対服従しなければならないから、主君の命とあれば、死なねばならぬこともあり、またそこまで行かなくても組織(藩・国)のためには敢えて不正をはたらくことさえ求められた。主君の命に背けば「裏切り」として、最大の忘恩に数えられた。なぜこのような不条理とも言える絶対服従が求められたかといえば、武士集団がかつて軍隊組織として機能してきたことに由来したからである。戦闘集団にとって、最も重要なのは「勝つ」ことであり、そのために必要なのは組織の糸乱れぬ規律と秩序であって、正義を実現することではない。つまり「組織の繁栄と防衛」、これこそが武士集団に最も求められたことなのであった。現在でも、一部の企業は、社会のみならず株主に対してさえデスクロージャーを積極的にしようと思わず、社内に不正があってもこれを隠蔽しようとする体質が拭えず、また時に内部告発者があればこれを異端分子・組織破壊者として悪意に受け止め、罪悪視する傾向があることも確かである。「勝つ」ことが「儲ける」ことに置き換えられただけであるからごく自然な成り行きであったであろう。これらはすべて武士道が戦場の軍隊組織に起源を持ち、かつ現代企業がそうした組織論を今なお引きずっているからに他ならないであろう。しかしこれも現在では、内部告発者を保護する法律が制定されるなど、もはや企業の独善は容認されず、社会正義の実現が何よりも優先されるべきであるとの方向に向かいつつある。

節約儉約への反省

武士道は、団結心・互助意識が強く、仲間同士がばい合うことを「武士は相身互い」といって美徳と

する。その反面、自分だけ利することを「抜け駆け」と称して卑しむのである。そして先にも述べたように、彼らが何よりも惜しむのは富ではなく名誉であった。だからいかに貧しくとも金銭にこだわりをみせず、常に平然として動じないことが武士の美德であった。＝「武士は食わねど高楊枝」企業が高度成長の波に乗って収益を上げて、それは資本の蓄積に回され、また従業員はそれを消費せず貯蓄に回した。これが、資本の蓄積、資本の巨額投資を可能にし、ひいては急速な企業の発展につながった。このとき、従業員たちは黙々と会社の方針を受け入れ、給料の増額よりも企業の発展の方を選んだ。

三河地方の織機工場から身を起こして、今や世界第1の自動車メーカーになろうとしているトヨタこそはまさしくそうした武士道の組織論に乗って成功を収めてきた日本的企業の代表格であろう。この成功は、かつて三河から身を起こして江戸に幕府を開いた徳川家康と共通のメンタリティーを持っていると考える。

今日では、個人主義的な価値観が優勢を占め、そのうえ現代の資本主義が、GDP優先であるために、節約儉約よりも「大量生産、大量消費」をよしとするために、こうした儉約を美德とする風潮は薄れ、儉約とケチが同義語のように見られることもある。

(7) これからの日本はどこへ行くか

かつて80年代に、マックスウェーバー著『資本主義の精神とプロテスタンティズムの倫理』（神の国、禁欲、勤勉、富の蓄積、投資、生産）になぞらえて、東アジアの急速な経済成長の謎を解くべく、「資本主義の精神と儒教倫理」（勤勉・節儉・現世の幸福・利よりも義を重んじる）ということが言われたことがある。

90年代までは、すなわちバブル前までは、日本の資本主義は、世界基準に照らせば、最も成功した社会主義（結果平等主義、終身雇用制度、低い失業率、小さい貧富の差、手厚い社会保障等）だとされた。

しかし、バブル後は、それが日本の構造的欠陥となって景気を低迷させている最大の原因だとして指弾を受けたことから、早急にその改革を実現しなければならないとされた。このために登場したのが小泉政権である。小泉政権は、「構造改革なくして景気回復無し」とのスローガンのもと先に掲げた従来の美点が欠点に変わったとしてその改革を進めたのである。その具体的な方針とは、端的に言えば従来の日本的資本主義をアメリカ流資本主義に変えることであった。

アメリカ流資本主義、すなわち現代資本主義（アメリカンスタンダードをグローバルスタンダードと言い換えられてしまったのだが）は、以下のような見方を取るのではないか。

「人間の本质は欲望にある」という、的確な人間観

「欲望の解放」を原則としつつ、「厳格なルール」でコントロール。

「弱肉強食」を原則としつつ、「敗者復活」でカバー。

つまり「機会の平等」は当然のこととして「結果の不平等」を容認するし、「少数の勝者と多数の敗者の誕生」を容認する。しかしこの多数の敗者のために「敗者復活」のチャンスが与えられるとされ

る。

この結果、わが国では伝統倫理の歯止めを欠いたうえに、しかも「厳格なルール」は未成熟のまま、欲望だけがひとり歩きをはじめてしまったように見える。つまり「欲望の解放」は実現したが、それを外部から規制する厳格なルールが未完成のままなのである。もっともこれは、“義理”よりも“人情”、“たてまえ”よりも「ほんね」を尊重するようになった頃から、その傾向は始まっていた。また企業の相次ぐリストラ、ままならぬ中高年の再就職、増え続ける若者のフリーター、起業への相変わらず高い敷居。つまり「弱肉強食」は当たり前となったが、「敗者復活」の社会システムはやはり未完成のままである。なぜなら、負けることも「恥」であり、ひとたび戦いに敗れて世間に恥をさらした者は、二度と日の目を見ることができない。つまり二度と世間にしゃしゃり出ではならぬ、出しゃばってはならぬと、発言権は与えられないか与えられても小さいというのがこれまでの通例だったからである。

(8) 日本社会特有の変化

先ず第一に挙げるべきは、家庭教育の無力化である。これによって世代間での伝統倫理(「忠」や「孝」、「誠実」など)の継承が徹底しなくなった。しかもその上に、戦後民主主義教育が、伝統的な倫理規範、例えば「親を敬う」や「年長者を敬う」などといった道德観念を「封建道德」のひとつで一括してしまったのである。

ところが、バブル期に身につけた欲望の自由な発散という行動様式だけは、確実に次の世代に継承されていると言われる。それは人間にとってもともと欲望は生得的なものであって、これの自由な発散は何らの修養も経ずして実践可能だからである。

従って「個」の優先、「個性」の尊重は、当然のことながら他人への「迷惑」という問題を新たに発生させた。換言すれば、「世間」という目に見えない規範力を持った実在がさして重視されなくなったのである。つまりこれまでわれわれが気にかけてきたのは「世間で恥をかかない」「世間体を失わない」ということであり、自分の恥も名誉も世間を通してのみ実現すると考えていたのであるが、この「世間」が希薄化してしまった結果、「恥」の観念も希薄化し、同時に「世間」とは別次元に成立している現代「市民社会」において、「(不特定の)他人に迷惑をかける」ということが現実問題としてそもそもどうということなのかということにも、全く想像力がはたらかなくなってしまったのではないかと考えられる。

(9) 「他人に迷惑をかけなければ何をしてもよい」という風潮

以前、筆者が中学生だった頃、担任教師が「人に迷惑をかけてはいけない」としきりに生徒たちに教えていたことを思い出す。今から40年以上も昔のことだ。それまで、人々は世間の目を恐れて言いたいことも言えず、やりたいこともやれなかった時代があった。それへの反省からであろう。この言葉は、「君たちは自由になった。しかし他人に迷惑をかけてまで自分の自由を主張してはいけない」と言おうとするものだったのだろう。これは当時の子供だけではなく、大人にも当てはまる新しい価

値観であったろう。

それから40年余、最近では車内での化粧や飲食、駅ホームや路上でしゃがみ込み、コンビニの前で座り込んでの飲食おしゃべり、こういった若者の姿を日常的に見かける。これに大人たちは眉をひそめる。ところがやめなさいとはなかなか言えない。別に悪いことをしているわけではないからだ。

そして当の若者たちは、そうした大人たちの非難を尻目に、「人に迷惑かけてるわけじゃないからいいだろう」「他人は関係ない、自分たちの自由だ」との主張したいかのようである。われわれがこうした行為を「見苦しい」とか「みっともない」と考え、「少なくとも自分たちの世代ではこのようなことはしなかった」と言ってみても、もはや説得力はない。

たしかに、「人に迷惑をかけてはいけない」という規範は日本伝統のものである。「法を犯してはならない」という以前に、「世間に迷惑をかけてはいけない」、つまりは「恥知らずなことをしてはならない」という規範が根強くあって、これが結局、日本における犯罪行為を少ないものにし、ひいては社会の治安を維持することに貢献してきた。

ところが戦後アメリカ民主主義の流入により、この伝統的な「世間」意識がその実体を喪失してしまった。今では、「世間」という言葉はあまり使われず、「社会」とか「他人」という言葉がそれにとって代わったかのように見える。

しかし、「世間」概念と「社会」概念の決定的な相違点は、他者を自分との関係性の中で認識するかどうかということではなからうか。つまり「世間」とは自己との関係性の中にある社会であり、今日言うところの「社会」とはそうしたことが考慮されず、常に他者を見知らぬ「あかの他人」として見ていることにあるのだろう。

だから、今の世のひんしゆくを買う若者たちでさえ、自分との関係性の中に他者を位置づけている場合は、言葉遣いにも気を配り、実に礼儀正しく、何よりも彼らに迷惑はかけまいと務めるのである。そこから「世間に迷惑をかけない」という規範は残りつつも、一方で自分の属する世間に属さない場所、つまり「あかの他人」ばかりの場所では、「旅の恥はかきすて」とばかりに勝手にし放題、「迷惑」という言葉はほとんど意味をなさず、違法行為をしなければよいということになってしまうわけである。つまり、今の日本人は二つの居場所を持っている。自己を中心とする極めて狭い範囲に限定される「世間」（今では「仲間内」と言った方がふさわしいかもしれない。）と自己の位置すらもはっきりしないほど範囲が極めて広くそのために全く捉えどころのない「社会」である。

「別に法律に違反するわけでなければ、自分のやりたいことはやってもいいはずだ。それに他人が干渉する権利はない。たとえ自分のやっていることで他人が迷惑に感じたって、そんなこと自分には関係ない。それは自分がやりたいことであるし、なにしろ法律に違反しているわけではないのだから、誰にもとめられやしないはずだ」という考え。これは自分が「捉えどころのない社会」に身を置いているという意識から極めて自然に導き出される考えであろう。簡単に言えば、「これは自分の勝手だ。あなたには関係ない」「私には自由がある」ということになる。それが、他人からみていかにみっともなくはずかしい行為で、つまりどんなに「世間の常識」から考えて「恥知らず」な行為だとしても、この時の彼の意識の中には「世間」という観念はなく、従ってまた彼の倫理観の中にも備わっている

であろう「恥」の意識が作動しない。これまでは重要な意味を持って言われていた「世間」に代わって、頻繁に使われるようになった「社会」というあまりに漠然としたイメージからは、自分との関係性の中で他者の存在を認識する心理回路がはたらかなくなっているからだと言える。

参考文献：

ルースベネディクト著『菊と刀』

新渡戸稲造著『武士道』

津田左右吉『文学に現れたる国民思想の研究』

和辻哲郎著『日本倫理思想史』

山本常朝『葉隠』

他